Hughes, R. (2011). Teaching and Researching Speaking. (2nd ed.) Edinburgh Gate, UK. Pearson Education. Ch.1. Issues in teaching and researching speaking. (pp. 17-27).

1.4 Where does speech fit in language studies?

- 「言語能力」と「スピーチの能力」の言語学的概念の学問はともに分解する傾向がある。
- 言語能力'competence'と実際に話すことや書くことのように言語を使う能力'performance'というようにスピーチの定義は二分される。
- 本質的にこの区分は Chomsky が疑問視した、どのように子供は言語をマスターできるのか、というものに基づき、最終的にどんな話者もほとんど完全に新しい談話を生成し、理解するというものに基づく。

Concept 1.3　Competence versus performance

人間は無限の知能を持つわけではなく、人間は、新たな言語の、それぞれの新しい例を単純に認識し、処理することはできない。Chomsky はより基本的な、無限の文を産出できるが、有限な人間の能力の範囲内で十分である程度まで削減された言語容量が基礎となっているに違いないと指摘した。こうした分を生成するような言語能力を'competence'と呼ぶ。

Competence はすべての赤ん坊が生まれたときから持ち、赤ん坊が聞いた言語サンプルを参照するという生来の言語の将来性をさす。

Concept 1.4 Rationalism and empiricism in linguistics

Rationalist と Empiricist の流派は一般に、お互いに対照的であり、何かしらの実社会におけるデータを重んずる実証的アプローチは、言語サンプルと「言語」そのものと複雑に結びついていることを基本とする。その一方で、合理主義者は「言語」を調査するために脳や心の内部を見なければならず、さらに実世界からのデータは役立たずで紛らわしくさえあるという考えを持つ。

Concept 1.5 Behaviorism

この観念は Skinner の考えに強く関連しており、行動主義者モデルの背後の考え方はむしろどんな内的能力からでも学習が世界との相互作用を通じて行われるというものである。

- 行動主義モデルに対して、最近になって、言語能力が一見多様なものであっても、生物学的、遺伝的に人間が持っている生得的なものであり、明らかであるという概念が 20 世紀に開発された。→この考えは生まれつきの認知モデルに基づく。
- 合理主義者のモデルは、インプットのための明確かつ量化可能なデータに完全に依存した初期の行動主義者の言語の説明に対して不満を持つことで発展した。合理主義者のパラダイムは根本的かつ抽象的な観念よりもデータ、特にスピーチデータにより根重点を置いた。
- 現代の言語学における重要な問題は、どの程度研究者が言語システムがスピーチの存在性から離れて、有用かつ概念化されうるかというところに関連する。例えば、UG と SLA 研究の基礎的な仮定が受け入れられるだけでなく、より重要な本来の言語能力を調査するために、実際の「とっぴな」スピーチデータから考慮外とする必要もあるということだ。
- 会話、あるいは談話分析の分野の研究者がスピーチの実際の組織と原動力（the actual texture and dynamics of speech）を扱う。
- 彼らは以下に言語が投げかけられるか、以下に言語とパラ言語学のメカニズム、たとえばアイコンタクト、ポーズ、笑いなどがコミュニケーションを与えているかを注視する。

- 理論的な短い記述と、それに対して実証的な基礎を置かれた言語学習のアプローチのうち、後者は前者よりスピーチの研究に直接的かつ即時的な関連性を持つ。

Concept1.6 Conversation analysis (CA)
会話分析は会話データの中の構造と社会的パターンの重要性について調査を行うもので、談話分析と多くの特徴を共有する。両者とも、センテンスレベルを超えた構造と複数の言語にまたがってそれらの一貫性と関連性の言語の広がり方に関心を持っている。DA は会話のターンのパターンにおけるルールのような制約について関係しているが、CA はより純粋に説明的な実態と社会言語学の方向性に傾倒している。

Concept 1.7 Discourse analysis
例えば、文や句を構成するとみなされる統語を見たり、単語とその内部の要素を調べたりするような方法がある。談話分析は、このレベルで項目間の関係には関心を持っておらず、それよりむしろ文、あるいは節を越えてどんなパターンが会話のより長い区分やテキストの間に存在するかを見ている。CA がただの口語のデータを取り上げるのに対して、談話分析では口語、文語問わず取り扱われる。

- 多くの研究においてパフォーマンスデータの取り扱いとその範囲について疑問視されてきたが、たとえばBerg(1997)は交互におけるスピーチとライティングにおける産出エラーは規則性の基礎となる調査の基盤として、データから理論へと

1.4.1 Historical perspectives on speaking
- 話し言葉の形式への考え方とそのカリキュラムにおける立場は時代、そして異なる文化を通してかなりさまざまであった。
- 話し言葉の形式への考え方は増大し、いかに、そしてなぜ話すことが教えられたのかという入手可能な初期の記録は徐々に薄れていった。
- 話し言葉の形式の性質は、話し手が聞き手に対してアイコンタクトやイントネーションの使い方、ジェスチャーなどの身体的な聞き手の視覚を通じ、納得させ、説得し、反論し、言いくるめるというものがある。
- その一方で、何らかの形で記録されないなら、話された言葉は本質的に瞬間的しか存在しないため、それ自体を綿密に調べることはできない。

1.4.2 Early attitudes to speech
- 古代エジプトでは、話すことは説得の技能、そして修辞学や他の人たちに影響を与える能力であるとして考えられた。書き言葉として 5 千年前のパピルスに演説と論争のトピックに関してのアドバイスが残されている。
- 古代ギリシアにおいて、話し言葉を介しての反論の仕方についての体系化が始まり、最終的に哲人教育へたどり着いた。
- 話し言葉の形式と哲人の間には強い関連性があり、おそらく今日では否定的な意味を持つ「詭弁法」という言葉への関心が高かった。
- スピーキング術は政治を中央で行うような者にも影響を与え続け、公生活において力強い発言は影響力ある地位へと導くものとなった。
- ローマの文明社会とキケロやクィンティリアヌスのような学者の登場でギリシア人の雄弁術の理論は司法と政界において実用的な使用が可能となった。キケロは発話の内容が深く、理解しやすいものをとともに、感情やユーモアへのセンスが聞き手への架け橋となるとし、そのサブカテゴリーとして句、リズムと抑揚の

効果的組合せが聴衆の心を動かすことに最も効果があったと検討した。それに対し、De Oratore は本当に説得力がある話し手はトピックについて卓越した知識を持っている必要があるとし、一般的な教育が優れた話者のための出発点であるとした。クィンティリアヌスはこれらの伝統を維持し、教育者として有名になった。

- いまだにヨーロッパの伝統的、古典的所作として、修辞的な機能の基礎としてスピーチを教えることに焦点が当たっている。
- スピーチを教えることへの古典的姿勢として今日まで残っているものには以下のようなものがある
  - ・発話の産出とスタイル対内容の構造
  - ・訓練の役割対スピーチの自然な習得
  - ・話すことの教育課程上の立ち位置と社会的立ち位置
  - ・個人のスピーキング能力の違いとそれがいかに他人に影響するか

1.4.3 The eighteenth century and beyond

- 19 世紀のはじめと終わりで言語教育における話すことの立ち位置は変化し、文法訳読法から Reform Movement と呼ばれるものへ、1880 年ころに移行した。
- 状況的方法、そして AL 法は 20 世紀後半に開発され、これはカラー出版やデジタル技術の革新によって口語をメディアを通じて教授することが可能になったものである。
- しかし、スピーチが「自然」に方向づけられている教授プロセスで使われたものの、実際の形式が自然に発生するスピーチ、あるいは本当に自然な spoken communication からはほど遠いものであった。特に相互作用はぎこちない/制限されたものでしかない。

（Concept1.8 は割愛）

Concept 1.9 ‘natural’ or ‘direct’ methods

文法訳読法の反応として 19 世紀の終わりから 20 世紀の初めにより自然な教育プロセスが主張された。口語形式が教育の最前線であるとし、1 言語による生徒と教師間の対話と学習内容の刺激を生じさせることが主張された。’natural’、’direct’ method は ‘total physical response’ (TPR)を導いた。

- 「上手に話す」という概念は、非常に初期の教育の伝統から、形式への姿勢を支配していた。
- 口頭の形式のための同時に存在する高い関心と、これの構造と特性に対する正確な注意の欠如が教室を越えて構成されている。
- 60 年代に Chomsky の影響を受け、そして 70 年から 80 年にかけて’communicative approach’の成長で、口語形式の指導に対して 2 つの明白な異なる変貌を示した。
- 一方では、変形の文法形式が内面化したとし、もう一方は言語が意味のある、かつ興味深い環境によって獲得されるとしている。

Concept 1.10 Communicative approaches

Communicative approach は 70 年代後期からアメリカとイギリスにおいて発展した理論で、以下にあげられるような特徴がある。

・言語利用に高い価値を置く
・言語利用によってのみ、効果的な言語習得する
・学習者の communicative competence の発達と促進を目的とする
・エラーを目標言語の理解にとって自然なものとみなす

・指導法と正しいコミュニケーションタスクの統合
・生徒中心の学習経路が好ましいとされる傾向
・学習者を中心に据え、学習プロセスと個人に影響を与えている要因を評価する